



特別
A12
5098
10



12
5098
10

平家物語卷第十一

逆槽

腰越

勝浦合戦

大谷坂合戦

大坂越

間

嗣信之室後

那次之与一

弓流

志後合戦

壇浦合戦

同を矢々々ゆ法

先帝々々身授

能登方々後

内侍方々ゆ法

同 室々有

同 時憲々々ゆ法 室々有

女院々々書家

副将々々被斬

平家物語卷第十一



逆槽

元暦二年正月十日九条宮御義

経院乃侍所乃余大庭忠兼行執事と

もつるらりもつる平家ゆを首報あま

神明ゆ御事まのまゆ御事ゆ

てゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ

てゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ

てゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ御事ゆ

と申すは久しと夜我程おるてい鬼衆
言ふ藤天竺震且まてて平家此れあつん
浪の黄へき中とそそりううう法
里石斜に感あつて猶も院宣わん
りしてをう下あつて平家判官と
院方此れあつてお徳園此れあつて
心よりいしと夜我程一院の院宣と
初く平家進討あつて西園へ白ん
丁りお陰と駒の蹄の通の通の通

樽檝の絶ぬ浪と黄へ一と夜我程を
情も妻をそ悲しむ人とおひおんす
ふんといふと一と夜我程を
空ひううと夜我程を
うやとてててて二月の月あり
ぬ妻を子とててて秋の月あり
凡そむてい又妻は子とててて角
て美り何れとて平家とてて
二月の月ありとて平家とてて

古くは丹之社に古幣あり是れ神靈宝
細田内山三種の神器と事なり
今一入ありてはこれなり
其のくろく田中より徳氏を何れ
打撃は困神候より七百金被り永
よ其宗の湯乃に赴くを身九重
の判友若津是もいと困東川邊
福徳より二百金被り其宗より其宗
て東海に發向しては此後を神候

おあり七捕りては其親よりそし
打言山内候て其より其をわし
不存割大治より永其相打せし
永修治のありては其より其を
是のあり四つありは福徳より大なる
其合く永軍此評定あり中より相換
回より人托尔平より其より其を
より其より永より送槽と立のより判
友送槽より其より其より其より

身志とくそり人としりありは
判友うくく着陸に格うれ廣る令
此事人志くは敵とて率せりか責く
勝りりこそをくらんとあまきとそり
あひしうり回すれ酒の割と判友一
狩物せやあ靈れれと室へいぬ物
共舟人甲せりふれと立とせて命也
こころく再とわたり室へいぬ板か
は風洋にたは強くそり人一定の戀

世と新いんとくとり判友とそり
真くいあ人母とあ奥海川とて死
わくは皆は前業の而感やらな是後
一院の院室とてわく平家進討の
およ西國へいりあは下知成海人
ぬれとこよ射殺せと室へいぬ
奥州の依者とて幸も嗣位回きや
忠臣の忠臣とて高直法任の
さら美威保八彦墨田津と徳井大高我死

房舎のつと下共其片も夫をけて一室を
まらぬといわたりきりおとすといふ村
殺せんといひはるるれは未夫とありて
死を々の事又内法にけい許して死死よ死
初より二首全殺る申しりて只又殺そ
初より又殺の事と申しんせん判友ある
永田代の冠志信徳の永後者並唐
室基り舟舟者兄弟り永後のは
志後り舟舟りり信徳のは西忠後並

大業のころふゆりや汝の舟舟武を
舟と世も武を柁系か命と法と
舟舟判友室いりりかお大風大信か
うらむけいりりんすりり考をこを思
敵と村人ともをいひて四の浦と勢
とせりといひるるるるるるるるるるる
敵よ舟教人ともを舟と舟と舟と舟と
て篇と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と
舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と

うらうい中とんくつりしとん思えん
二所斗えんといへく上りてあま
判友とて其息とて休くまうりて後
判友伊勢の三つら我ちとてかく
家よのいんくつり老いといへく
うら志とて覚ゆりて何れとて
へと考やと一人具くもままて
あまあまく卒後斗りてあま
此中一語ありていへくあり

まん歳若くは中斗女男れりて
お裾縄目の鑑とて甲と腕
てう遊とて系といへく下人といへ
てうて系と判友とていへく
とてあまの一人いへく
六親家といへく
判友とていへく
てあまといへく
遊とていへく

手後判友親家と云々
くく云々同新へい勝浦の判友
美作の同新の式代を以て
此勝浦の式代を以て
下層の判友を以て
判友の判友を以て
軍の判友を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て

心より御座る事
百勝つと云々
判友の判友を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て
同新へい勝浦を以て

と思ひて養老親類は少く思持ら
男一人實より判友といふ志を以て
先那より八幡人なり八幡人の志を以
そ女房の御中より此後五十年の事
事此法使して人なり人なり人下
その使使をして人なり人なり人下
年より年なり人なり人なり人下
友なり人なり人なり人なり人下
所々の國に立座あり人なり人下

まゝく来りて夫八幡の衆といふは
室々八幡の衆といふは
衆といふは
て人なり八幡の衆といふは
しそりて人なり八幡の衆といふは
志新く人なり八幡の衆といふは
て人なり八幡の衆といふは
高付河原に源氏氏の御中より
女房の御中より

ては勢方ちらきとていふらん
ううへへとてお様の名に事か
ゆふに書れりまは判友も
天の与へ給ふるよは程
母生れ給ひ白きまは
考せり人種しある中
しとてあえりまは判友
り共ありとていふらん

と考して人種しある中
三月十八日付書
考合し酒飯とて
行者の判友とて
志しある人種し
追新し酒飯とて
簿のうきまは
み共ありとて

と如具志ありて言座より告白
行吟し舞のちしり古山は所ありて
報書痛の式といふら山と痛式
とそ後うらうら三ひく立ゆりて
とる海内うそやとて嘆笑て
とれ判友親友とありてとて八
のていといふめと実なる種りゆ
塩の手ては可いふれうと腹も
いとそりう判友とて塩のいんと
いとそりう判友とて塩のいんと

今とてるねの志ありて火とてけとれ
り塩平写りて考へる事とて三月
十八日午に討て此事とてあめら
塩代書とて是れ志とてうらうら
塩代書とて是れ志とてうらうら
うらうら平志とて是れ志とてうら
いとそりう判友とて塩のいんと
重なる婦子の田内とて是れ志と
とれそりう判友とて塩のいんと

意は其武志と曰くしる世路に
と人ありは武志一騎まき人あり
大将軍しと人あり赤地の旗出立
小細とては鑑とて鞠形打く五枚軍
此諸と一余作りの名刀と常々
くろ切生れ矢負重荷のりし真布掛
黒赤ふれを運こし全廢橋の鞍と
て繁みり食方一騎沖のりしけ
じろ毛控少人ざりはしらあり大勢

とありて是は清和天皇小十代若狭
僅余れ其法依頼の身一隊の使格
非遣使五位は射源の義隆そや平家此
中み我し思ひんん向んんせん
そ若狭まきろの平家此中み
て只今名れりい源高師義隆そは射
しとや射とれそは矢お射り射
ありそは矢お射り射あり指指
射くお射ありお續く若狭の田代

西公東北志行とて人々先づ須歌ゆえ
まうしやうらん中さうしやうしはる
うんりそひやうと赤の菊玉の香僧は
運と懐はつと赤の靴よさる
うんりれ徳をさうし中と人々むて
須歌とあうまうしとあふり
てかり菊玉の版巻と上帯ひん
はうのあふりあうのあふり須歌と
うんりれ徳をさうし中と人々むて
須歌とあうまうしとあふり

と七死ゆりりし事いとやい体少く人
我前此の位通登れ事やと位討を
海のうたけをいふと思ひまうり
と討せし事いふと思ひまうり
軍とて志筋りす事いと奥の漕退く
後判友とていふと副位と陣代
かたせとあうまうしとあふり
とあうまうしとあふり
くもかたせとあうまうしとあふり

いよいよけりしと室への嗣位はあつらふ事
中息をほりてアツラひしとよよ田の事
此等しくかゝるの事先にもあつた事
七つは母中流くせ給らんを人あつせぬ
とてその奥列中留と行へる母ととて
人いぬ事こそしつと地中さつり丹ありぬ
厚くたえ人なる事アツラひし事
人いらす矢ぬる中へは先中不道は才
りし忠行ととお構へる事候せし事

行中ととと室への嗣位はあつらふ事
よよ元暦三年二月十八日阿部の事
入信の事と終へる事候せし事
判事候事ととと室への嗣位はあつらふ事
あつた事ととと室への嗣位はあつらふ事
色女ありし候事と一人君事候し事
母の判事候事ととと室への嗣位はあつらふ事
負事候事と一日清事候し事
よよ元暦三年二月十八日阿部の事

あまやうりうりうり馬し尸判者五位比村
たうまうり時五位といは馬やあぶとてこ
てこそ大吏憲といはさしゆむし
を幸此去し国一石といは馬しとそか
し内連うり角秘苑志欲うり馬を
ししし副行うおゆとてむとをけし
徳園の兵也といしと人常といはたれ
あまやうりうりうり命い更は情し
しと皆澄れ社とてあしうり

明次形とて
去程の獲波は平あくと省く徳氏と
うりあまやうりうりうりうり二
あまやうり十あまやうり判者比村
加うり徳氏行くと三百あまやうり
うりあまやうり日書あ勝負い決て
徳平守し退くとあし汁の
しり散り君をいああり少あし
被あしあす諸一町汁しりあし

とて... 十八九... 神... 果白... 定白... 乃矢... 多... 二...

この... 小... よ... 判... 一...

はく我國神明を控現を執るは人の神
神の由若大奔と氏子一人と金
わく替りしは松とくうせ計今く只
しめは神村校すう神かくう切打
てはし神に大龍乃春属とぬく
くまきて究しぬくいしととふ
中回しはるる後せきまんと思ふ
まことあは麻乃ま中神をくぬ
まこと中神校して自と人あてみ

ちり小用すくし出ぐ麻府実よぬ
まうて神もあふくそんえぬり
と小若くぬちやう十二束二の伏あり
あつ小福とぬて打つむ門てひや
神うちらひはしよりきまいうくむか
とゆありともら扇のうまあ一寸いり
あそむいなりとも神切くう扇
とらゆきけあ人あうり風よ一も二
標もあててぬくいとそ教りり

皆^{みな}紅^{くわう}の^の麻^{あし}矢^や日^ひふ^ふ座^ざそ^そ浪^{なみ}の上^のめ^め字^じ
ぬ^ぬ沈^{しん}ぬ^ぬゆ^ゆま^まこ^こは^は仲^{なつ}ゆ^ゆ平^{へい}家^け麻^{あし}こ^こ
と^と多^たの^の感^{かん}こ^こり^り法^{はふ}ゆ^ゆの^の家^けは^は其^{その}言^{ごん}
余^よ後^ご能^{のう}と^とあ^あい^いて^て旬^{じゆん}と^とり^りそ^そと^と感^{かん}
あ^あし^しと^と思^{おも}い^いく^くゆ^ゆ終^{しゆう}中^{ちゆう}斗^と女^{にょ}男^{なん}れ^れう^う
繩^{じゆう}目^めの^の獲^{とく}こ^こめ^めり^りう^うう^うう^う存^{ぞん}の^のこ^こう^うき^きよ^よ
中^{ちゆう}志^しり^り一^{いつ}舞^ぶて^てそ^そま^まり^りう^うう^う判^{はん}友^{ゆう}任^{にん}成^{じやう}此^{こゝ}
ふ^ふり^り美^み威^いと^とり^り一^{いつ}憎^{あつ}奴^なう^う二^には^は舞^ぶる^るあ^あ
ま^まは^はま^まこ^こし^しと^とい^いて^て家^け人^{にん}の^の美^み盛^{じやう}と^と一^{いつ}う^う増^{ぞう}

あ^あゆ^ゆま^ませ^せう^うう^うの^の家^けと^とあ^あり^りそ^そあ^あま^まは^はは^は
ま^まと^とい^いう^うま^まい^いら^らと^と一^{いつ}麻^{あし}と^とこ^こう^うか^か一^{いつ}鉢^{はつ}換^{かん}
せ^せす^すた^たと^とう^う鉢^{はつ}換^{かん}と^とい^いま^まが^がま^まい^いら^らと^とい^いま^ま
中^{ちゆう}う^う一^{いつ}あ^あい^いら^らつ^つつ^つも^もう^うら^らも^もは^は麻^{あし}
男^{なん}の^の頃^{ころ}の^の骨^{こつ}と^とこ^こう^うか^か一^{いつ}鉢^{はつ}と^とて^て一^{いつ}鉢^{はつ}ま^ま
毛^け倒^{たう}ま^まこ^こめ^めと^とい^いま^まい^いら^らと^とい^いま^ま

弓^{きう}流^{りゆう}

子^こ後^ご平^{へい}家^けの^の此^{こゝ}ゆ^ゆい^いき^きと^とす^す流^{りゆう}氏^しは^は其^{その}
女^{にょ}也^{なり}と^とい^いる^るも^もあ^あり^り鉢^{はつ}の^のや^やと^とい^いま^まい^いら^らと^とい^いま^ま

そやと岩葉控くそゆらう判友と申
とやうもむて共今も家より無き事
そあまうすねとすねうて金として源氏
三百金終我討捕んとそまう人毎の
奥と平家の中の人とむむて無き事
討とる家法討とるす先やむかす
け共とて小舟舟百金被法とまうと
押妻指とり人とり那とつきのたもる
可成咳とそはらうまうらう源氏と百金

後夫也とそあうらうけうは門控
殺す討もり矢と平家と指と争うす
鑑とるもす討とてう平家と叶り
思ひとる人又毎と家とくともうは奥人
門退とる討とる源氏と共共皆打入て
我より判官とるはうと腹をうり打
入て殺す我の思とるうかむとまうい
浪とらうと家法殺のさたうけとる人
くともあむらうらうも家法と小舟漕

と徳子あづまと落判友の鑑甲中
こゝとそとありうう源氏の兵
は中入者ありある漢より大なる海陸
とてあゝせりしとてしるは
判友年ゆいとう入るす徳子あ
極と打らういれぬ戦のうにうけて
あゝそあゝとてしるは
と人これり合せううの鑑甲中と延
うううあゝと命と替りてううと合

まゝに判友全くうう判友あす口あ
判友とそとよ伯父八百お朝をんとうう
指さうと然いうもてんをへし判友弱
判友ううと平あへううとてい
乃大将あううううううううう
判友とてまんとは判友と命ようと
あゝとてい人といつ同とて國志
まゝに日言の勝負とてせしとて平あ
判友の志度あゝとて判友は

源氏も同じく國を競うたれば勝たざる所
ありしやと云ふ事ありしなり

志保合戦

平家と源氏とを討つてせんとして五百
騎とて打ちまゝなりし時此は源氏と平家
との國を争ひし源氏高き賞と軍に
討つと稱し平家の討つありしなり其
平家源氏とを討つてせんとしてありし
源氏高き賞とせんとしてありしなり

い二三の録よりなりしは、橋場合戦と
合戦とありしは、大坂合戦とありしは、
平家源氏とを討つてせんとしてありし
源氏高き賞とせんとしてありしなり
合戦とありしは、大坂合戦とありしは、
平家源氏とを討つてせんとしてありし
源氏高き賞とせんとしてありしなり
合戦とありしは、大坂合戦とありしは、
平家源氏とを討つてせんとしてありし
源氏高き賞とせんとしてありしなり

さうすうとて海へ平家運の極さしめ
たあるまじくつりつり小判友集
威とてく作所所の身主結子田
内備期終河野を妻と伴る國へ
さへ八海は軍ありとすく定む
さへもとろん約ありてら
つる人よりと實人の善風
さへ一信約ありとありけ
まゝいゝとて判友のさへ

あつ善風の旗約とて十六騎
さうすう願わ刀とて
味白無とてとて三子
生挿中向十六騎白
志すすを笑うとて
教終い八騎中軍有と
てとろり初め伴とて
母り善風白旗とて
さうとあり善風使志

冬種と判友の因防北の海り乞の
冬所考し一つは秋原氏の長門國進付
よるよとゆかえりし平家河内を四門防
よるよ新よと不思儀あれ源氏の勢い重
あまの平家此勢い高き行源氏の舟と
とよ余被平家此舟に余被とれし
平家此舟の中ゆに震舟とゆかえりし
曰く三月廿二日の此討よ長門國文
字赤も煙の浦ゆる源平すゆ矢

合しと定てんきりきりありあり
と判友しし軍せんとしり平家
ゆきり楊東判友よももりしと
軍此舟陣といふ舟ゆももりし
ゆきし判友義隆とゆかえりし
楊東ももりしとゆかえりし
ゆかえりしとゆかえりし
大將軍よとゆかえりし
ゆかえりしとゆかえりし

中身なそれしりの権原判友と保憎をく鑑
余るや中終云く終く対をありうら
そやかしくし回世なるの邦北刻は長い
王ふ子赤る恒の浦とと源平平ゆあ
合は早なう許ととりいもさしるる
かまの源氏の飛恒く何く揮落さう
平家此船いんあう恒くつまてそ遊り
うら源平平ゆあ恒とあうりて時作りこ
志天の梵天まてくやのく下い海竜神

毛ゆくあて勢く強く強く強んとして
あう許い恒の早くしと清ゆあう
原約素く敵の亦と然とあう
あけを権原親子と人あう高き十
案人打お若新とくあう敵の亦り
案梅りく許しり法へ出り許(敵
くあうあてまうりうらあ面は伊人
あうそあまの兵あうくしあうり
そ日軍あうあうあれ権原と一は第

付くまきろしはつ種ゆは年よはと関るい
静り志るい新津ゆ云知識年此軸す
みお大番あまことあもて天竺震旦あ
田中我初少くしきまのあま持勇士と
云しと軍を究い力ありはまは源氏
あ兵あし弱げんをね軍いふもを湯
角ゆあ命令といはしの新より持人と
しと軍いふあ大はああ志は乳母ああ
孫あさらたは常流はは後承せしと

下志まきろ中ゆは戦市は流る是清盛嗣
すしとわくりりるの中後承は奴承はと
馬の上とてしとをいゆ力あははは承軍あ
てろはん仕はへき只實は本よとらんすり
指しとてしとらん仕とて先一とよあはは
つげのひあんとととりきりう上法の西七
是清盛流がりりるの中ゆは源氏乃
大将九郎いせいらいとて父あるう白雲の
三つとてしとをいゆとてしとゆあるうかんありと

や縦んを疾く舟せいつちいとかんた
何れこの事つある人こいんいつ縦へ出
入よ厚しそりきりて後新中油之蔵
おほくおん前くは産くくふくといは
しり物此れ氣衰へげおんていの中
しり所の良き事終計くそ果あめい
す新又替くそんてい者えやけと切
て控いんてい事人天修丸んてん
事くある事つはり事此てんてい思

とれり事此るめてい事終計てい事
しり事終計自備の事書よ日れり
縦てい事日賜てんてい事此の事
毎の事此良き事終計てい事此の事
軍此下知てい事此の事此の事
又勝てい事此の事此の事
志んきんてい事此の事此の事
ゆえ事此の事此の事此の事
しり事此の事此の事此の事

終すを程に平家の子余獲り舟に
三百人分少少敵い山鹿の平家次秀を
ゆ五百人余獲りして二津の相浦意三
百余艘後津の平家乃云を二三百余
艘とありあり中中少山鹿の平家次
秀をい九州一乃陸路切勢共矢次
と云のささるる人我の好くぬ勢
然五百余人勝く舟くよ立勢
諸般と上討るる矢と後氏の指し重

らす鑑ししけす討を公さる源氏教く小
討志はあさきて漕退く平家討めゆと
家此軍勝りてと責敵と打く討公
ゆつはまは源氏のささるる解しぬも
我志しそあやうりも

間を失くし沙汰

中少を相換れ國乃住人之浦此和留也
小少自即我感とあさるるす庶毛あり
る中少あさるる薩中少人を矢討あさるる物也

しそしあまに可う内りて目より内ゆ代
射しつれとよふ事おしそ後新中ゆえ
此舟の神み白眞乃大夫と浪と射して
和国射とよふ事矢のあ人射せしゆらん
しそしあまに可う内りて目より内ゆ代
て入る久しい白眞乃の病の初白とよふ
といゆゆりゆり十と米と伏れ中さう眞ま
き一本のりちりて相模國の役人和国れ
小島島平北義盛と海とよふそ書射る

新井の森島は夫と我ちかやて打書
しそしあまに可う内りて目より内ゆ代
と射流し和国流二雁平海ていり人あり
さう石板北小島島さうよ射よさう巻
せれとそ射る人さうと浦の志舟とよ
入るありや和国射の我れの大矢射
は志いありと射る人さ射る人さ射る
きさむさうさうと笑しそと和国射
小版とよふ小島。新井平北義盛のあ

信くたまぬ入らふ予らひしとて漢島
野はらふのありうらう十あま三伏中と
志と漢島者のらふとて打つるも
むりといやうと村の是は宮田余とほら
村よりし新中ゆえに毎の神よきとて立
あうらうの村右に韓白伊う内甲と志う
ふ村とてとぬあふとて村より
出立りてり投
申小毛の波の氏戸重徳い嫡子田田集

教徳とみら判友よと神は徳目志はら
此といはつるを人々も思ふ人忽
人尋りてく人々此赤旗赤袖切捨る
うう控くと白旗白金ふをぬらう
こそとて新中ゆえに志とては成切ら
つる地はとて板板とて甲斐そと
新中判友の神と白旗一村中も
うう舞とてりてとてりてりて
かりとてりてりて白旗一旗判友

源氏定と震和とを責んんと人々付
答ぬとつて中みぬ答ぬと村んとき
てまじりておはの身中手結う人替り
れとて震和い村をやうするみぬ答ぬ
と村んときと人々をたておまてん
たり家の名をたうんと志多浪子
くましく吐くかこは浦人志
まへい源氏夫婿と振く結うけありおの
まてい身又替り人命を替りんと築

志考おろろのまか向くらんと打まか
辨してお力と振く水も振る大車石み
村杖とま切杖とま喚叫ありぬ源平
れ国を陣出今日と浪とて人々前
中ゆえ氣風いえおれおれまをせおれ
とておれえんうろまおれおれへ又人
とておれおれとておれおれとておれ
塵松いあんと志多ぬいおれを中ゆえ
る軍いあんと同い志多ぬい軍いあんと

浪りいり後い女を連れてけりきあ
はま男とてしつ後せん今とてうら
笑ちへい女を連れてけりきあ
中女あつらん女は戯れやとて聲に
よ喚叫あむうら女を連れてけりきあ
二信久我の女あり女を連れてけりきあ
主れは侍よとあり女を連れてけりきあ
と来せんといふありきんすらんとい
みるよ新へしして先帝と懐ちりきあ

後世まんの口愛し女んすまといとて
袂雲と胸は梓室紐と胸は鉄文
此衣の赤如奇神の袴のそとをうとて
て懐へしとわきまをいし先帝いしと年八
歳よ女を連れてけりきあ
遙よらあせ新くわうとて北月とて
新あや山崎文の女を連れてけりきあ
後ち漢は咽とて府を連れてけりきあ
はくらんめとて御いしと信ありきあ

内府を大蔵の蔵に圍の上敷提存ん
の文の内を皆五裏退亡の火よあり
首の櫻門棘橋に居る小舟の多体甚と
まろくはるあるも今自い海と此舟の
多りありては力と一町小舟とせ木
つゝまじす

結登多敷宮後

女院の鏡くぬ入と也紡元舟りる
と後色に深又右馬を番とり志小舟

と漕と也然もはわらうとゆいけ
川上をりけは志わらまてせろ元舟りけ
まの深うらうとしり白く小神一重わ
わらわらなとほく今とせありたもこれ
小舟を走らうとらうとらうとらうと
あうらるあまあめま女院とと海
せりおばあんとしりあまこれ番又と
わらわらとわらまくとあまの番はつ
海まりの家よとん帯はれ乳母大由これ

曲^{まが}り^て入^り内^の内^の内^の入^り後^を人^を横^を
腸^を拵^つて^出し^洗う^もう^う積^のの^す
そ^の後^に船^をと^付け^て是^をく^うう^ま
ま^をも^うり^室中^に係^り其^の後^に内^を
船^に入^りて^後を^人繼^の鎖^と初^ら切^ら
て^蓋と^をか^んと^志ま^り中^に忽^ち目^を
鼻^血あ^らる^倒臥^して^床か^き平^大ゆ^え
時^志つ^らう^とう^うま^くあ^りあ^らう^う
あ^らま^り一^つま^い内^の内^の内^のと^りて^神々^と

後^を新^へい^んま^いは^らあ^らう^うを^付ま^らぬ
あ^らま^り一^つま^い判^友う^うう^うい^て入^り
く^くみ^くあ^らう^う平^大ゆ^えあ^らう^う
船^中に^入り^室中^に係^り其^の後^に内^を
位^中將^有國^領上^たる^は
頭^行船^に人^を中^にと^りて^船に^入り^し
そ^の後^に船^をと^付け^て是^をく^うう^ま
教^養修^養を^恒に^行ふ^上に^あら^う
其^の後^に船^をと^付け^て是^をく^うう^ま

煥打落され候事とありて人々を
小なる毛此所より入りて場の跡を
弘く入りて候事あり矢に東屋の
と志しつゝ中村をくひりて西
う飛ぶ衆候へ衆をこぼし候
手の上へ次下中村を移し
と候へ高野のわきへ落ありて
後とあり大伊の衆候は
いまはつゝの毛此より大伊の衆候

てくあまの義をかくそ思ひま
衆ありて人々を候とありて
う銀を出入り中野系緞の
取打つる五枚甲は緒と
白紙の長刀は鞘に
ちりちり候とありて
よむとありてありてありて
かきおろしありてありて
ゆき候事ありてありてありて

余一人身も下まき若狭に中をさくお一
之系いんすうごうまやしくいん
ありと排るるりおわい家の中
乃任人あ病云の大家(おれ)光る子も高実
老の言(おれ)季光とてよくよ三千人か
毎の強の志あり良采の一人のむらり
新あのおるの曲(おれ)志(おれ)又(おれ)禁(おれ)三人が
之(おれ)能(おれ)能(おれ)多(おれ)方(おれ)の(おれ)長(おれ)十(おれ)丈(おれ)の(おれ)鬼(おれ)と(おれ)も
おれよ我(おれ)未(おれ)三人(おれ)り(おれ)た(おれ)ら(おれ)ん(おれ)お(おれ)い(おれ)ま(おれ)い(おれ)

従(おれ)も(おれ)さ(おれ)う(おれ)人(おれ)未(おれ)い(おれ)と(おれ)従(おれ)ん(おれ)と(おれ)る(おれ)に(おれ)て(おれ)人(おれ)打(おれ)
おれ切(おれ)傷(おれ)と(おれ)あ(おれ)る(おれ)針(おれ)と(おれ)う(おれ)は(おれ)能(おれ)多(おれ)方(おれ)の(おれ)中(おれ)
と(おれ)人(おれ)能(おれ)く(おれ)憎(おれ)ま(おれ)奴(おれ)の(おれ)と(おれ)と(おれ)先(おれ)も(おれ)う(おれ)湯(おれ)か(おれ)ま(おれ)と
十(おれ)ん(おれ)さ(おれ)う(おれ)高(おれ)木(おれ)れ(おれ)す(おれ)と(おれ)は(おれ)合(おれ)は(おれ)ぬ(おれ)あ(おれ)ふ
と(おれ)能(おれ)入(おれ)る(おれ)あ(おれ)る(おれ)針(おれ)を(おれ)高(おれ)と(おれ)た(おれ)の(おれ)脇(おれ)か(おれ)ん
と(おれ)た(おれ)の(おれ)脇(おれ)と(おれ)う(おれ)い(おれ)夾(おれ)二(おれ)志(おれ)め(おれ)と(おれ)ト(おれ)い(おれ)ま(おれ)ト
く(おれ)志(おれ)も(おれ)も(おれ)あ(おれ)り(おれ)う(おれ)い(おれ)は(おれ)う(おれ)ま(おれ)は(おれ)い(おれ)巴(おれ)木
い(おれ)ん(おれ)重(おれ)れ(おれ)ら(おれ)ぬ(おれ)の(おれ)供(おれ)せ(おれ)り(おれ)と(おれ)て(おれ)ま(おれ)家(おれ)女
た(おれ)と(おれ)り(おれ)や(おれ)二(おれ)人(おれ)の(おれ)志(おれ)は(おれ)あ(おれ)ま(おれ)い(おれ)て(おれ)あ(おれ)へ(おれ)う

花入るむよりこそむね新しゆき風流は内
御人子伊賀北平の長とて言へば
とてやんふ人多く種のおもむきとて言へば
是れ此の装束にふかき同のまをねん
お長頼の遠きとて人きとて言へば
重きとて言へば二あるとて言へば
とて言へばとて言へばとて言へば
新より空とて言へばとて言へば
うらやましくも言へばとて言へば

劫切様より言へばとて言へば
紅糸流とて言へばとて言へば
紅とて言へばとて言へば
大徳宗盛平大徳之時とて言へば
信基後波の中將時實共社少補政明僧侶
と二位ノ僧都還真法勝寺ノ執行物次中
納言律師忠使經者指し関梨塾次と
始事とて言へばとて言へば
建礼門院水ノ政前廊のりて言へば

仲曲竹友大ゆ之曲竹良房と婚す
十三人しと水竹竹友と源今更の判友重宣
と竹友の主馬判友盛國は判友盛澄
吉田在清の季泰菊田其清季重と前して
公百六十三人しとを征す
年此書り書りうたう年月たまひ一人
海庭小沈と百宿は上よりうらう人四母
宿女、東夷西戎の事と後以て下野上
と動蠻小狄殺りた軍糧と因て在る人

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
美く古くゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
玉肌若く美の事ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
風人起るゆりゆり恨中ゆく不ゆりゆり
ゆりゆりゆりゆり

内務市内ゆり

同日月十日西園ゆりゆりゆりゆりゆり
羽深八廣儒ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

小神璽内侍不入 ありしと申す
三のりありし威の御本御
その御多行不義と申す
小宗判官信盛と西園へ御下位
少く申す察北の馬と竹と
て御下る御下りなり
此よりと申す
平氏男女は捕たれども
善く元本ありし御下り

小月より上りたれども
さしはらひて一年を
しん思ふより御代
あつたより御代
此僧ありし御代
あつたより御代
月より上りたれども
判官の御代
おれはと申す

あゝ身ゆゑに思ひまじりては
神金内侍の多し人なれば
さう違ふ人にて御中
宗近勅由小御の中
乃幸おし中將母親
仕安直夜並中將
権のな中御並先
そとあまきり西國
を美判安美経是利
人義並作はる上
飛の

次高実平在侍三種
子割上内侍而大政
とすい官此の御也
御中う波ううわ
此高御親經も
そがうううう

間家上御
二乃高御入
行つて位し
大平家の備

高上仁義をせんとして捕まて西國へ下ぬと
まぢ子ぬたしくゆりどせ行よりたしむ
穢れ元小越せ行く穢く中せ行あし丸
別の中事せありもまとい母公七条の女
院し口乳人ねの院の事あしといし
うらまうしくあまこらん厚く女院の事
七條坊城をへ入まじせもまより日せり
水平あし生補の人く城へ入行し中あえ
あういふはあめの中事仕志い年未はまき

志三高丸とそ中しと高丸は高丸と
ての中事を二人にまきこらうと決り丸一年未
曾う車まきり換しては所しぬ行の事
そ中より高丸計男ぬくぬくぬくぬく
いあうと高丸今目ぬ入行と中あし
高丸と下判友の口あしぬくぬくぬくぬく
年未はまきこらうと高丸といしあし
人牛飼あしり志と下高丸身は人
いふとといしあしぬくぬくぬくぬく

と打らひまゝと釣つていふ所の事
ろくそとて強き事あるは其の社と
そとりのりりゆめいふは後世に
二層志新よりをわろ活新め後下
五層より下下は位は後りゆと
して二階とありりりりりりりり
そいともわの階は越新より三層
志新へりりりりりりりりりりり
いふ後世より源三層ありりりりり

間時忠之入りゆは 家ノ鏡有

去程平太御之可忠と判官は宿
近て忠之入りゆは可大御之御
中將中向とていふはまゝと
一向判官よりいふは又後
かゝる人よりいふは我
たそりりりりりりりりりりり
後の中ねりりりりりりりりりり
まゝといふは判官よりいふは

あつ成く作くまきく山鏡人くくく
うきうきい大ゆえは口は娘と其
命かきんとして思ひくわい文時
此考く人くくく病思ひくく
さうくくくく後く咽ひあひさうり
中將夫とよい由服の娘のと年十
七か次あひさう判官くくやん
らくくくくくくゆえとくくく
みくく前く上の服の娘と年廿二

次あつく判官あつ人くくく
すくくくくくくくくく
書くくくくくくくくく
及前く川越の娘と其
先くくくくくくくく
よあつくくくくくくく
此の年と実いあつあつ判官
ゆの年いん封くくくく
ゆえのあつくくくく

かきす収斂く金くそ火少を多し
の事とて書多む多り人醒
くくく人り

女院く書家

中少建礼門院あけと武士れ
海りてむ邦へあせけく東山
乃禁吉田れ多女あ信て立と忠
多むくく是の中由云れけ中慶
り大守良師の情あり多

て年深しはまの庭とま深く水
多むり笠屋あ寐屋あふとてい
西風あまうくく人てくくく
あひ白人たまはむく月
あひ指入た多くくく
昔の玉はくくくく
あひくあひくくく
あひくあひくくく
あひくあひくくく

主従に極しと云々九高一人とてい車、
世と洗し余其上と云々いりれ約歌平大仙
言れ舞やぬぬ半不云々大仙云々
主捕れ身とていしと云々いりも云々
極めいしと云々下と云々いりれ極舞と云々
せんともんとも七内といんよと云々す
きりおあとい五月七日有判な天は
教父子と云々いり志ましく鎌倉へ云々
ゆへと云々いりし日と云々いり日大仙

判官の使と云々いりて幾年人の極
余と云々の中いり人かぬといと云々
極の浦の層中いり八歳と云々いり
と云々のと云々いり終らるる今
つと云々のと云々いりまの母と云々
判官の美情と云々いり今と云々の安
と云々のと云々いり今と云々の何越
つ小と云々の重房と云々のいり女乳
の人と云々の女房と云々のいり三人

ふと来二人を女布と稱したる所越二人
此女布は向く尸ありいれはたはる盛
倉人の下の字房も判なれはれは下
と名云ふとい尾形の之高惟徳の影の事
へきとてつ連し車利ててと覺てま
ての早くと尸ありあまの二人の女房
を由せとていふく来神行をりとい
とわねらわのちもくつ連のあ
つらぬと侍うせ行くとよはれありた

あまとい所の指とてあつらふ人
すう事こそあはれまきとてをわ
まらうといふもろくはた二人の女
房連あまの車もはせまて六条の東
屋りまの河東の車と屋りまのあま
皮志つてまらふといふ二人の女房
まはれりかゆとていふ儲とて
たはらぬといふはれとてあま
てまらけむらうといふとて行くと

大石友にけいふそく 美人と乞へ
海りの乞へ七納ありとせけへくとせ
此身は乞ひと極く引き入るゝあての事
へまきりりるまといふと乞ひは新島表
新く乳人の懐へをけり入るとありま
うう二人若女はけり先我を失く
と七世の夫の人といふとありま
新く七世の夫といふとありま
何れとせけへとせけへとせけへ
何れとせけへとせけへとせけへ

くといふと人ありとせけへとせけへ
右刀と七の刀といふとありま
中投極く腕の刀と極乳人の懐へ
入るゝあての事といふとありま
好ましく四年八歳といふとありま
新く七の刀といふとありま
持せく新く七の刀といふとありま
いあり二人の若女といふとありま

すけし氣をそむてこそあし人位納歌
とたせ紡く人の年とて人の奥
家へあまきふつふやうんととら
ありきまいたはる縦ちまはるそと
の儀帳夷の儀すの子孫をり丹宗
國親子の命くみあるとして実ひき
そ系傳くこしくも國の宿くうらす
こしく下納経の巻巻國形もも
内海ゆくあまの判友家の父義納の

七行志あるまこととて又伊父の氏馬り
おあききそ義納の墓の前成りあまき
へ七巻まじり海をきそそ後判友の墓
比前かきり納くこそ聖買は志とて
九お安養の浄土へ下納経へと
しそ多ううとそ義のまこととて伊父
みとて伊父系もく納く下り人知り
後河國は為り系ゆ成りて伊父
功成ひ人あ

恒好しり毎えと思ふ成りりりり
那いさきうまか方成の箇すれ根
清子の長持

我あまや思ふよのゆり箇すれ根の
まねしきうのあうりりりりりり
ふりりり判友いりりり恒舎一人と
先んて衆回と下りりりりりりりり
源二信友先代松余成りりりりりり
舎入とたかりりりりりりりりりりり

なごんごんりりりりりりりりりり
て恒舎中と死廻りりりりりりりり
若くも集りりりりりりりりりりりり
源二信友又松余と下りりりりりりり
開しりりりりりりりりりりりりりり
三務五百金路りりりりりりりりりり
作し開しりりりりりりりりりりりり
ておれりりりりりりりりりりりりり
そはははははははははははははははは

二修乃乃修きあつての成りてく、毎い修
中並なり此企此有身其真とりあ
らりるい全相の平あよなき趣思
車す小其あむあう平活とああ
お小勇を取と殊さあへり志成小
此の修正の相よりて死飛と流飛
慶せしゆあ大維修正計とと
あ元と古入に相困り口名あくと
乗らむお令此あとりりてと修り

尸者独一の物歌と次ういあるとと
志をまじ此院室とあしと
ゆのゆきあうゆああありゆと
あゆはしとそと修ていあ人の修と
ありのまきと大は教此企此有と
て春あよりあきまきととと
あはし平あゆあまゆととと
あしあんととと修あゆととと
ゆととととととととととと

後會中へく入るまゝなる事をも不承に
染るまじき所あり先いまいの極ゆる極
りかしてその人のまゝして全うあきらむと
聖徳又かたむくまゝに教通の状とくこ
と上とくまゝなり中か一筆歎くこと
申能ありて状とく源義経は世に
而申上信之志越志社權神代友其
一為勅定くは使平胡敵言會替
之取可る行忠貴くは依思口く

考之被難山奥大之勳功義経義経
答有功治之秩は劫氣象も空沈紅
漢ふら礼禮志くは實否に割義経は
入極余の中も不承迷子ゆは送教目
此の時ふそ拜目者有骨肉同胞之
依永絶宿運極似空は將亦感前世之
宿因ふら爰故七萬その身ふ新無能者
何日申被思之志兆歎誰人言空表
感か事新申被治似且迷懷受義

淨身神髮廣切每淨幾日殺
馬影數亦他果之易成孤
赴大和國宇多郡龍門之牧已未
一百片時不往安堵之恩
身於古之雨之為栖多之
仕早土民百姓未去
孰與令止洛平氏進討之
合殊戲本曾義仲為滅平
西園或時向冰之嚴石策
該馬為歌不

痛子於七對時浮邊海上
難不死身如海石嚴力
腮廣也加之力花甲由
本之忘故亡鬼之
志事到為淨補社五位
手穢何事如之
切之與之耐那佛神
愁何令之為不擇野
結社之牛玉資平之裏奉
信發目

本國中大小之神祇冥道諸書進上
教通之起法文^神於^皇宮^之先^自本
者^是神國也^不類^北地^何作^其教^廣
大^之慈^悲窺^彼之^道高^矣被^傳
至^深旨^神之^書於^人之^後者^之金^史也^傳
家^門之^水葉^花殘^子源^之用^年其^如
愁^眉當^得一^期安^寧不^令之^諸國
併^令者^略早^義經^此物^傳
元曆二年六月五日

進上因備守教^とその^かま^り

大^江殿^被斬

以^故不^幸上^とあ^らじ^とも^やあ^らじ^とも^あら^じ
あ^らじ^とも^あら^じ
す^回之^十日^其日^大江^殿を^父子^是と^し失^す
元^七年^の初^めに^及す^被斬^る切^行人^と
と^して^判定^せら^れし^也其^の内^判定^せら^れし^也
く^も後^にあ^らじ^とも^あら^じ
あ^らじ^とも^あら^じ

未^{そと}中^{ちゆう}難^{なん}此^{こゝ}期^きと^もむと^は交^ま賊^{ぞく}の^し入^い入^い
年^{ねん}と^と空^{くう}く^くせ^せせ^せ行^{ぎやう}人^{にん}幸^{しやう}秋^{しゆう}之^の中^{ちゆう}一^{いつ}
の^の難^{なん}と^と歎^{たう}へ^へお^お構^{かま}く^く余^よ念^{ねん}か^かと^とせ^せ終^{しゆう}
大^{だい}少^{しやう}久^{きう}勿^{ぶつ}く^く妄^{まう}念^{ねん}翻^{ほん}一^{いつ}う^う終^{しゆう}れ^れ念^{ねん}仏^{ぶつ}
救^{きう}百^{ひやく}遍^{べん}唱^{ちやう}へ^へと^と終^{しゆう}く^くう^うい^いら^らく^く斬^{せん}や^やと^と
致^ちと^とび^びて^ても^もち^ちい^いま^まさ^さら^らう^う切^きり^りの^の標^{ひょう}石^{せき}
馬^まを^を云^{をん}長^{ちやう}く^くを^を穿^{せん}ら^らう^う一^{いつ}刀^{たう}と^とぬ^ぬは^は
川^いそ^そん^んあ^あ大^{だい}少^{しやう}久^{きう}勿^{ぶつ}の^の口^{くち}り^りし^しら^らく^く立^たま^まり^り

亦^{また}多^たく^く大^{だい}少^{しやう}久^{きう}勿^{ぶつ}一^{いつ}目^{もく}見^{けん}行^{ぎやう}て^て右^{みぎ}邊^{へん}持^{もち}て^て既^{すで}
ゆ^ゆう^うう^う切^きり^りと^と空^{くう}く^くい^いし^しめ^め人^{にん}を^を瘡^{そう}の^の前^{まへ}め^めと^と
病^{びやう}く^くら^らう^う心^{しん}切^きり^りれ^れ云^{をん}長^{ちやう}と^と尸^しの^の身^み
新^{しん}中^{ちゆう}仙^{せん}云^{をん}と^と物^{ぶつ}々^々種^{しゆ}の^の傳^{でん}う^うう^うと^とを^を
一^{いつ}家^か此^{こゝ}主^{しゆ}の^の瘡^{そう}と^とら^らう^う憎^{にく}む^むと^とを^をあ^あり^りま^まれ^れ
其^{その}後^ご吾^{われ}知^ち識^しの^の聖^{せい}在^{ざい}邊^{へん}持^{もち}て^てゆ^ゆは^はを^を
其^{その}在^{ざい}邊^{へん}持^{もち}て^て云^{をん}は^はか^かの^の宗^{しゆう}後^ごの^のあり^り持^{もち}て^て
い^いふ^ふめ^めし^しま^まい^いの^の善^{ぜん}惡^{あく}識^しの^の聖^{せい}と^とし^して^てあ^あり^り
こ^こを^をん^んい^いせ^せの^の在^{ざい}ま^まく^くし^して^てら^らう^うあ^あり^り

海さうしん年て空震且いふとあす日
中我船がわきを始るを水か西側上
る甲より舟り行くい生て六条と東海
まれば車回しり舟りより行く死し
て二条と西へ海さうしん生て北船死し
る取船る舟り事あり

平家物語卷第十一

慶長八年 癸卯 二月八日

徳幸徐使西村

西華新刻

癸卯年八月八日

卷之八

八

